↓底辺→天辺↑

いま四年目ローラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
←底辺→天辺→

【Ｎコード】
Ｎ９７９７Ｑ

【作者名】
いま四年目ローラン

【あらすじ】
よくある転生トリップを経験したと思ったら、生まれた先は最下層！　でもそんな俺を引き取ったのは――国のとっても偉い人。これは内政チートフラグなのか、それとも陰謀に巻き込まれて死亡フラグなのか？　心労の日々が始まる。
月に一度は更新したい

キャラ紹介・ネタのちょこっとメモ（前書き）

キャラ紹介は読まなくても問題なく読めますが、ＳＨのちょこっとメモは読んでおくと分りやすいかと。

キャラ紹介・ネタのちょこっとメモ

キャラが増える度に改定を勧めていくので、そのうちネタばれが出るやもしれません。現在は特にこれと言うネタばれはなし。

＊エリク・フォン・シャルフト

主人公であり、将来には心労で倒れるか謀略で倒れるかのエンドしか待っていない可哀想な（中身青年かつ外見）少年。前世では（軽度の）オタクに分類され、古いものから新しいものまでネタに走ることがある。サンホラーであり、言語がドイツ語であったことに内心興奮していたりする。成長したらメルヒェン氏に似ている。子供っぽい遊びがとても好き。

容姿：毛先ほど白い黒髪で一見ゴマプリン、薄い灰色の瞳

身長：栄養不足で六歳には見えない

魔力：実は魔法なんて楽しいものがあった。平均の五倍弱。隔世遺伝

学力：良い方だが、とっても良いというわけではない

歌うことで魔法を使うため、ノリノリである

＊ハルトムート・フォン・シャルフト

主人公の祖父。彼もチキンであり、父親に逆らえずエリクの母を捨てた。子供の扱い方をよく知らないため精神が成熟しているエリクに内心安堵している。子育ては壊滅的で、会話に失敗しまくって息子に毛嫌いされていたと言う実績がある。

容姿：心労のせいか白髪、灰色の瞳
　でもまだ四十代前半
身長：特に高くもなく低くもなく
魔力：当時の王弟を父に持つためかなりの魔力。平均の五倍強
　歌えば歌手になれそうな勢い
職業：シャルフト公領領主。宮中での公務の大半は分家に任せているが、最終決定権は彼にある

＊テレーゼ
　シャルフト公の屋敷に仕えるメイド（中年）。スラム育ちのエリクに対して厳しく、少々見下している様子。名前がメルのムッティと同じなので、エリクはいつかテレーゼを無理やりにでも改名させるつもりでいる。

＊ミーシャ
　シャルフト公の屋敷に仕えるメイド（やっぱり中年）。エリクに名乗って「改名しろ」と言われたことでエリクを少し勘違いしている。今のところあまり出番はないが、そのうち何かしらの出番がある……はずである。何かにつけて名前（だけ）は出る予定。

☆☆文中で出る、ＳＨネタのちょこっとメモ（でも詳しいことはググろう）☆☆

ぴこ魔神：同人時代のＣＤの一曲「お願いっ！～」で、日本人の舌では（母音十三音全てを発音できる人でもないと無理じゃないかと）発音不可能な呪文を唱えることにより召喚されるという魔神。お願い事を叶えてくれるそうです。

インドカレー：同上ＣＤのボーナストラックの一曲「呪文解明☆～」でやっと分かる、魔神を召喚する呪文の一部。発音出来たら本当に召喚できそう。

テレーゼ：７ｔｈ　ＣＤ「Ｍ？ｒｃｈｅｎ」の主人公であるメルメル―（愛称）のムッティ。薬草の知識で死にかけた子供を救ったりメルメルを井戸にドボンさせた二人組に剣を振ったりする、理知的だがアクティブでもある女性。

黒の予言書：ブラッククロニクルと呼ばれる、有史以降から未来にまで記された二十四冊セットの本。「ブラッククロニクル」というコーラスを「ブラックロリコン」と聞いてしまうとシリアスな世界観が崩壊する。また、ニカ様とはいわゆる中の人であり、「オレを書き変えようとすると火傷するぜ？」という内容のことを言っている。

『全体的に根本的に潜在的に』：上記の「お願い！～」の歌詞。

メルヒェン・フォン・フレードホフ：７ｔｈ　ＣＤ「Ｍ？ｒｃｈｅｎ」の主人公。愛称はメルやメルメル。作者の友人が無類の亀好きであり、亀にメルメルと名前を付けてしまって泣きそうである。ちなみにテレーゼもいる。これこそ改名して欲しい。

ミーシャ：第六の地平線こと６ｔｈ　ＣＤ「Ｍｏｉｒａ」の主人公の一人、正式にはアルテミシア。健気で可愛い女性で、妖艶遊女カッサンドラ先輩と鉄拳遊女マリッサ先輩の付き人をしていたこともある。でも双子兄のエレフの方がこういう説明の場でのネタに困らない。

ストーカー：「マドモワゼル、私でよければ君の話相手になりたい」と怪しい誘いをかけてくる人。性犯罪者が多いじまんぐ氏演じるキャラクターの中で（今のところ）唯一のストーカー。下着はトランクスらしい。

００・プロローグ（改）（前書き）

連載放置して書いてしまいました。今は公開している。短くてすみません。

00・プロローグ（改）

異世界トリップというものを、オタクな皆さんだったらよくご存じのことだろう。オタクじゃなくても小説で普通にそういうジャンルがあるし、小説好きな人間なら絶対に一度は目にしたことがあるはずだ。だが、俺の言いたいのはナルニア国物語とか果てしない物語のような異世界トリップじゃない。いわゆる転生トリップ――「死んだと思ったら異世界で生を受けていました」系のアレだ。

『○$#×！』

『▽＊&！』

やけにはっきり見える小さな両手と男女の顔、ぼんやりと滲む周囲の視界。意味が分らない言語を使うその男女は俺を取り囲んでいて、その格好はお世辞にも清潔とは言い難く、というよりもぼろだった。ずだ袋のほうがまだしっかりしているんじゃないかと思うほどのぼろ布をまとった少年と少女――としか言えない年齢の二人――に見下ろされ、俺は嫌な想像をしてしまった。俺は昔から想像力だけは逞しいと言われ続けてきたのだ。高校あたりからは妄想力と言われたが。

もしかして、俺、最下層に生まれたのか？　ここがどんな世界かは知らないが、もしかして俺、ストリートで寝起きする方々の子供として生を受けたのだろうか。そりゃないわ神様……せめて一般市民だろ、何で根なし草の子供なわけさ。

「絶望」と言う程の悲しみはないが、顔を両手で覆って部屋の隅で泣きたいくらいには辛いし悲しい。何より俺はまだ二十四でこれから脂の乗る年齢だったし、結婚もまだだ。人間として以前に動物の雄として何もできないまま命を終えてしまったなんて寂しすぎる。

両手を握ったり開いたりしようとして力を込めるが人差し指がピクリと動いただけだった。紅葉のようなこの手は見るからにかよわくて、そんな手が付いているオレの腕は女子供でも簡単に折ってし

まえるだろう。人間が未熟児で子供を生むというのは本当なんだな……手足を自分で動かせないし、もし手足が動かせたとしても頭を支え切れずに倒れるのは明らかだ。

悲しくて目が潤み、気が付けば俺はわんわんと泣いていた。

01・底辺→天辺（周辺）

俺が生まれ育ったのは初めの想像の通り治安なんてものをどぶに捨て去ったストリートで、文字なんて勉強できるわけないし日課は残飯漁りだし石投げられるし、世界観なんて理解するよりも明日のご飯探すのが先と言う……下の下な生活だった。初めて泥水啜った時は少し泣きそうだった。でも、両親に何故俺を産んだのかと言った事はないし憎んでもいない。

どうして彼らを嫌えるだろう？　汚い姿なのは服がないからだ。学がないのは勉強する場がなかったからだ。常識外れなのは違う常識の元で生きてきたからだ。彼らにはどうしようもないバックグラウンドなのに、どうして嫌悪感を抱けるだろうか？　こんなにも両親は俺を愛してくれているのに。

両親である二人はなるほど世代交代の早いストリートチルドレンらしく十二三で俺を産んだため、まだ十代というミラクル。俺？　俺は今六歳ですよ。死ぬ前の俺より若い両親に変な感じもしないではないが、周囲も似たようなものだし慣れた。

この数年は俺が一番年下で、精神は大人に劣らないはずなのに子供扱いされている。四年前には四歳の子が、三年前に二歳の子が病気で死んだ。死産だって良くあることだ。清潔な環境とは言い難いし、ここでは子供が死ぬことはごく当然のことなのだ。

だけど俺はいつまでもこんな場所にいるつもりはない。きっと金持ちになって見せる。前世の知識を総動員して成功をこの手に掴むのだ！

「エリク、エリク。そこにいるのか？」

「うんいるよ、母さん（ムッティ）。何か用？」

母さんだ。路地裏の、一般家庭の子供なら立ち入りを禁じられている物騒な区画、その一角に俺と両親の住む家がある。家の中から呼ばれた俺は考えるのを一時やめて中へ走った。そう言えば最近は

剣を持った変な奴等がここらへんをうろついているようだが、今のところ俺の両親も友達も無事だ。一体なんなのだろうな？

「どうかしたの、母さん」

家と言っても崩れかけたレンガの壁に大部分が崩れた屋根という、雨露が微妙にしのげないバラックだ。母さんはぼんやりとしていた。まだ十代のはずなのにもうその顔には皺が深い。環境がそうさせるのだろうか。俺は心配を滲ませながら母さんに声をかけた。ゆっくりと母さんが俺を振り返る。その目はとても、悲しそうで。

「ごめんな……幸せになれよ」

「へ？　ど――」

玄関の影から突然現れた影に手刀を落とされ、俺は気を失った。

目覚めたのは温かい布団の中だった。今生でこんな柔らかい布団で寝たのは初めてのことだから目を剥いて驚いた。一体何があったんだ？

「お目覚めですか、エリク様」

見回せばどっしりした布――つまり上等な布――のカーテンがかけられた天蓋付きベッドの上に寝ていたようで、部屋はベッドの五倍くらいの広さがある。前世のアニメ知識から考えるとここは寝室か客室なのだろうけど、俺がここで寝かされている理由が分らない。

口を半開きにして呆然としていると、堅そうな扉からノックが聞こえメイド服を着た女性が入ってきた。「メイド萌え！」なんて言えそうにないおばさんだ。

「あの、ここ、どこ」

俺は警戒を滲ませておばさんを見る。誘拐か――？　でもこんな臭い餓鬼を誘拐して何になるっていうのだろうか。どうやら寝ている間に体を拭かれて服を着せかえられたようだけど風呂には入ってないようだ。髪が汚いままだ。シラミやノミがベッドに移ったりし

てないよな？

「それは私にはお答えできかねます。お目覚めになったのでしたら湯浴みを……。当主様に面会して頂きますので」

当主と面会？　誘拐じゃないのか？　いやでも誘拐してきた餓鬼をどうして客室のベッドに寝かせるだろうか。綺麗にしたいなら無理矢理叩き起こして水をぶっかける方が早いし。内心首を傾げながらおばさんの後をついて部屋を出る。磨き上げられたタイルの床は上品なコツコツと言う音を響かせ、生まれてこのかた靴なんて履いたことのない俺の足がペタペタと鳴る。おばさんが不審そうに俺を振り返り足元を見て目を見開く。

「どうして靴を履いていらっしゃらないのです？」

「靴？」

靴なんてあったのか。と言うかこの足はもう靴なんて窮屈なものは履けないぞ。瓦礫で鍛えられた分厚い足裏の皮を見せれば、おばさんは嫌そうに顔を歪めた。

「湯浴みを終えたら履いて頂きます」

なんというか、嫌な感じだ。俺の育ちが悪いと馬鹿にしているのだろうが、上流階級の常識がどこでも通用すると思っているのかね。前世があるとはいえ俺は最下層生まれの最下層育ち、お上品に育てられた人間と異なるのは当然だろうに。

廊下を十分ほど歩いたか……。無駄に広い屋敷内の端から端まで歩いたような気がするが、これでもまだ廊下は続いている。導かれた部屋には猫足の浴槽が置いてあり、三人のメイド――みんな中年――がその中にお湯を注いでいた。ほかほかと上がる大量の湯気は懐かしさを湧きあがらせ、なんだかどきどきした。風呂に入るなんて今生で初めてだ。大の風呂好きな俺は前世では温泉地で宿をはしごしたことがある。中でも一番好きなのは雪見風呂だな。露天風呂で一杯、なんてことも頻繁にした。一杯どころか二本とか飲んだけど。友人を連れこんで溺死しないように気を付けてもらったのは良い思い出だ。

俺がぼんやりと浴槽を眺めていたのが悪かったのか、俺はおばさんに着ていた服を脱がされ素っ裸にされた。パジャマらしいそれは丸めて横に放り投げられる。なんというか雑な扱いだ。

「さあ、ちゃんと洗われて綺麗になってくださいね」

おばさんは三人のメイドに目で命じると部屋を出て行った。俺は優しく引っ張られて浴槽に突っ込まれ、頭のてっぺんから足の先まで泡だらけにされた。――お湯に大量の垢と泥やなんやが浮かんだのには我ながら仰天したけど、それ以上にメイドが引いていた。仕方ないだろ、一度も入ったことなかったのだから。近くの川？　泥川だけど何か？

それからお湯を三回張り替えて六年の汗を落とした俺は驚いた。持って来られた姿見に映る俺の髪は霞んだ黒なんかじゃなくて灰色で、それもどういった仕掛けか知らないが毛先に行くほど色素が薄く根元ほど黒い。ゴマプリンみたいだ。鏡なんて見たことがないから自分の瞳の色だって見るのは初めてだ――底に銀箔を散らしたように輝く、色素の薄すぎる灰色の瞳。姿見をベタベタ触って自分の顔を覗き込む俺をメイドたちは初めて鏡を見るからだと判断したのか何の文句も言わず、俺はおばさんが持ってきた靴を無視してひたすら自分の顔を見た。少々やせぎすと言うかゲッソリした体格だが、将来が楽しみな美少年じゃないか。これじゃ誘拐されるわけだ。あれかね、太らせて――標準の体重に――から囲って性奴隷ルートですか。少年好きな伯爵夫人とかが美少年を集めて逆ハーレムとか？

これだけ顔が良いとそう思ってしまう。

そりゃあハーレムメンバーになれば職業の自由とかはないかも知れんが、最下層で泥水啜っているよかずっと人間らしい生活が送れる。美食とか温かい布団とかの幸せは得られるだろう。でもなぁ……母さん、俺はそんな幸せなら欲しくなかったよ。

おばさんに履かされた靴は革製で固く、俺の柔軟な足には締め付けがきつい。歩きにくくてふらふらしながらまだ歩くこと十数分――もしかしたら二十分。当主様とやらの部屋に着いたらしく、俺は

またおばさんに室内に放り込まれた。なんてババアだ。
部屋は応接室かそれとも執務室か……執務室かね、本棚とか凄いし、机も立派だし。執務机の前には四人がゆったり向かい合って座れるローテーブルとソファが置かれ、上座に一人用のソファ、そしてそこに座る初老の男性。男性？　え、もしかしてこれ俺お尻の貞操失うフラグ？　やだ怖い助けて母さん。
おっさん――いや、爺さんか――は俺にソファに座るように促した。俺は右手のソファに腰かけ爺さんを見る。ついでに座ったのは一番扉に近い端っこだ。身の危険がある限り近付かんぞ。
「よく来たの、エリク。儂はお前の祖父シャルフ公ハルトムートじゃ」
は？　どういうことだ？　目を丸くした俺に爺さんが語りだす。
――まだ説明してくれとは言ってないのだが。
爺さん曰く、母さんは本来なら貴族の息女として育てられるはずだったらしい。しかし双子の兄がいたので捨てられ――この世界のお貴族様達は双子を忌避しているらしい。まあ、市井では双子は受け入れられているが。双子だから捨てるとか言っていられないからな。この捨てたと言う話の時、爺さんは強硬に反対したが爺さんの父親が許さなかったとかなんとか、どうでも良い弁明が三十分くらい続いた――偶然通りかかったストリートチルドレンに育てられた、らしい。これは母さんから引き出した情報なのだとか。
で。母さんの兄である息子がついこの間落馬して死んでしまい、他に兄弟がいなかったため急きょ昔捨てた娘を探せと言うことになった。でもやっと見つかったその娘、つまり母さんはとっくの昔に結婚しており、果ては子供までいる始末。母さんへの再教育は大変だろうが信頼できる分家の息子を婿養子に取ろう、という計画を立てていた爺さんは早くも挫折した――代わりに、新しい計画が持ち上がった。俺を教育すれば良いのである。下層の住人の血が混じっているとはいえ俺は直系男子、それもまだ六歳だ。今から家庭教師でも何でも付ければいっぱしの貴族に育てることができると爺さん

は考えた。らしい。
「身勝手だね、貴族って」
「貴族とはそういうものじゃ」
しかしこんな理不尽過ぎる命令を下したわりに、爺さんは思考回路が現代的だ。何も説明せず「今日から儂がお前の爺さんだ、さあ勉強しろ」と無理矢理勉強させるという手もあっただろうに、餓鬼に対してまで理性的に説明をする。餓鬼は見てないようで見ているし聞いていないようで聞いているものだからな、一方的に怒鳴り付け命令するよりも分り易く説明してくれた方が理解を示すことが多い。餓鬼だと思って見下さないその精神は称賛するべきだと思うね。でもだからと言ってすぐにハイそうですかとは言えない。
爺さんは話している間ずっと辛そうに顔を歪めていた。――こんな世界だ、親子の繋がりは転生前の両親と比べ太く固い。母さんが自ら俺を手放すなんて考えられなかった。考えたくなかった。
「……どうして母さんは俺を捨てたの？」
「捨てたのではない！　儂が引き取ればお前がもう汚い恰好もさせず冷たい飯も食わさせずに済むと、そう説得したのじゃ！」
ストリートチルドレンは上昇志向が大きい。自分たちだって言葉を理解できる人間なのだ、あの文明の利益を享受したいと望むのは当然だろう。――誰もが望む、上層の生活。それが目の前に転がっている。この汚い町に住む誰もがその果実を欲し、だが手は届くことなく空を切る。それが我が子に与えられようと言うのだ。どうすれば良いか分るからこそ、母さんには断れなかった。
「――うん。分った」
頷く。だって分ってしまった。下層階級で生きるのは常に前線で味方の支援なく戦うのに等しい。食糧の補給はない、服の配給もない、敵軍は活力に満ちいつでも戦える構えで、こちらはただ蹂躙されるのを待つだけの日々のようなものだ。誰だってそんな捨てられた軍にいたくないし我が子を来させたくもない。安全な本陣に送れるなら喜んでその手を離すだろう。つまりはそういうことだ。

「分った……」
二年前には同い年の女の子が貴族の馬車に轢かれて死んだ。去年は視界の邪魔だと言ってゴミあさりをしていたおじさんが滅多斬りにされた。数か月前には振られてイライラしているという理由で十五の姉さんがレイプされた。その姉さんにはここしばらく生理が来ていないそうだ。
上層階級の奴等は俺たちを同じ人間だと思っていない。轢き殺しても「邪魔なモノがぶつかった」としか思わないし、滅多斬りにしてもレイプしても罪悪感はないのだ。俺たちの命の重さは塵芥よりも軽い。誰だって我が子を砂絵のように風に散らしたくなんかない――だからこそ母さんは選んだ。俺を手放す覚悟をした。気持ちが分るが故になんとも言えない……俺としてはこれからも会いに行きたいが、きっとそれは母さんと父さんを困らせるだけだろう。今生の別れがあんなだなんて全く酷すぎるが。
そう言えば、俺を引き取るとか言うこの爺さんは偉いのだろうか？　縁を切った娘の子供を引き取ってまで血統を守らなきゃならん家というくらいだ、きっと物凄く偉いのだろう。貴族の階級の順序なんて覚えてないが、きっと特に偉い地位の一つに着いている違いない。屋敷広いし。
「ところで爺さんって偉いの？」
「うむ？　ああ、権力としては国王陛下の次じゃ」
「……は、はぁ」
どうやら俺は最下層から最上層に来てしまったらしい。シャルフ公だっけ？　それを俺が継ぐのだよな……不安だ。物凄く不安だ。ライトノベルとかを読んでいる限り王宮は陰謀のるつぼ、そんな中で人生の大半を過ごすことになるのだから。
「帰りたくなってきた……」
爺さんは良い人なのだろう、うん。だが、こんな偉い地位をいきなり目の前に突きつけられても困る。
「いや、帰らないよ？」

爺さんが縋る目で見てきた。怖くとも一度頷いたんだ、背負わなきゃいけないのだとは思う。だけどさ、六歳児に何を求めているの？　もしかしてさっきの説明って自己正当化のためじゃないよな？

「自分はちゃんと説明したのだから大丈夫」なんて正当化じゃないよな？　何か爺さんが隠している気がするのだけど気のせいだよな？

爺さんが誤魔化す様に手を叩いた。

「テレーゼ！　テレーゼ、エリクを部屋へ」

……テレーゼ？

俺が衝撃を受けている間に入ってきたのはさっきのおばさんで、しかつめらしい顔を崩さず俺を見下ろした。見下ろしたと言うより見下したと言う方が正しい気もするが。態度悪いなぁ。俺が何かしたか？　靴を履かなかっただけだろうに……育ちが悪いからかね？

――ということはこのおばさんは差別主義者か。嫌なもんだ。

「エリク様、どうぞこちらへ」

「うん」

だけど俺にはおばさんを嫌いだと爺さんに言う権利はない。中年ってことは古参なのだろうし、爺さんの傍に控えているのだから信頼されているに違いない。それを俺の好き嫌いで処分するのは躊躇われる。俺は謙虚でチキンな男なのさ！……自分で言うと空しくなるなコレ。

それに嫌いな理由も理由だ。俺を見下している、というのはまあ解雇には十分な理由だろう。こんなでも一応当主の孫なのだ、その孫をさしたる理由もなく見下すなんて行為は許されない、と思うんだが。そうだよな？　貴族社会なのだし。ライトノベルとかでしか知らないけど貴族社会は完全に身分ありき、血統ありきのはずだからな。でも俺がこのおばさんを嫌いな理由はもう一つあって、それはごく個人的なことなものだから全く言い訳にならない。

でもな、言わせてくれ。俺はメルの母さん（ムッティ）と同じ名前の中年太りババアなんて見たくない。その名前はもっとこう、上品でお淑やかだけど芯の強い女性が名乗るべきだ。お願いぴこ魔神、インドカレ

l
!

02・夢想→現実

おばさんに連れられ慣れない靴でよろよろと廊下を歩く。おばさんは淑女だからかそれとも俺に合わせてくれているのかゆっくり歩いていて、リーチが短いうえにふらついている俺でも十分に着いて行けた。

「ここでございます」

そうして歩いて三十分くらいか。爺さんの執務室から裸足で走れば十分もかからないだろう部屋に案内され、覗けば俺が目覚めたのとは違う部屋だった。――まあ、ベッドメイキングするとはいえ俺は泥と汗とノミシラミでかなり汚かったからな。あのベッドで俺を寝かせるわけにはいかなかったのかもしれん。貴族ってそういうことに煩そうだし。

「ここが、俺の部屋？」

「少し考えれば分る事かと」

このババア！――俺が後継者として指名された暁には改名させてやる。テレーゼなんて名前を名乗らせておくものか！

内心ぶち切れながら俺はおばさんを無視して上着を脱ぐ。パジャマがあるのかどうかは後で確かめるとしても、ずっとサイズの合ってない襤褸を着ていたからか、かっちりした上着がなんだか着心地が悪い。見まわせば学習机を二回り小さくした大きな机と背もたれつきの椅子が窓際にあった。見るからに金のかかっていそうな上着を投げ捨てるのは罰あたりな気がするから椅子に上着をかけてシャツも脱いだ。

「皺になります」

このおばさんはきっと、俺が爺さんの本当の孫じゃないとか、孫だとしても汚い血が混じっているとか考えているのだろう。俺からすれば爺さんの孫だろうが孫でなかろうがどうでも良いことだが、おばさんにとっては死活問題に違いない。爺さんが俺を孫として受

け入れたのなら、下はそれに従うべきじゃないのだろうか？　よく分らん。何を言っても無駄そうだから無視すれば、おばさんは小さく舌打ちした。あんたこそ品がない気がするのだが。

「これだから育ちの悪い者は……」

ぼそりとおばさんが呟いた言葉には呆れるしかない。今までスラムで生活していた俺に何を求めているのだろうか、この婆さん。

――と、こんなことを思ってはいるけど、面と向かってとなるとどうも尻ごみする。だって俺は責任を負うことが怖いのだ。自分の言動にはきっちり責任を持ちましょうなんて言われても逃げたくなるし、と言うか小学生の時の失敗をまだ引きずっているし、事あるごとに思い出して悶絶するからな。俺はチキンなの、自慢じゃないけど。繊細で傷つきやすい硝子の少年なの。

ズボンも脱いで椅子にかけて、俺はベッドにもぐりこんだ。パンツ一丁だが恥ずかしくはない。元々ストリートでは下着なんてものはないからな。逆にパンツが違和感ありまくりで、露出狂に目覚めたわけじゃないけどパンツも脱ぎたいくらいだ。寝る時は服を全部脱ぐ裸族の皆さんの気持ちが分ってしまった。明日から全裸で寝ようか。

「もう寝る」

そう言えば盛大なため息を吐かれた。おばさんからすれば俺はこれ以上なく無礼な餓鬼かもしれないが、この世界の礼儀作法なんて俺が知るわけないんだから。

ごく自然に眠りに落ちた俺は、気が付けば真っ白な空間にいた。重力も地面もなく、近いも遠いもないその空間はただひたすら白かった。

「――うっ」

俺は影さえないことに気色悪さを覚え、次いで三半規管が悲鳴を

上げるのを聞いた。視覚的にも平行感覚の掴めないせいか吐き気が湧きあがる。体を鍛えているわけでもないただの一般人を無重力の空間に放り込めば、きっと俺と同じように感じるに違いない。
吐き気で顔から血の気が引いて行くのが分る。熱い胃の中身が食堂を逆流してくる。――吐く。そう思った瞬間、食堂を圧迫していた濁流が消滅した。何があった！？
「ああ、ごめんなさい」
そんな声が響いた瞬間、真っ白な空間は板張りの床に薄ピンク色の壁紙をした十畳ほどの部屋に変わった。部屋の中央には一枚板のテーブル二脚の椅子、ティーセット。そして、黒髪に赤い目をした少女が座っていた。
「黒の予言書……！？」
肩と鎖骨がむき出しの黒いワンピースドレスを着た少女はどう見ても黒の予言書だった。声も聞き覚えがあるし。
「いいえ。私は貴方の言うところによる『黒の予言書』ではないわ。でも全体的に根本的に潜在的に近似した存在ではあるわね」
なん……だと！？
「その容姿でネタに走られると物凄く違和感があるんだけど……」
それも『お願い！ぴこ魔神☆』のネタだとは。あまりに衝撃的すぎて、つい俺自身もネタに走ってしまった。まじまじと彼女を見つめていれば、その白い腕がふんわりと椅子を示した。
「長い話になるわ。座って」
俺はかき消えた嘔吐感を何故か引きずることなく――もしかするとこの空間が何かしらの作用をしているのかもしれない――テーブルに近寄り椅子に腰かけた。ニカ様にそっくりな彼女は手ずから紅茶を注いでくれる。どうぞと促され飲めば、転生してからさっぱりだった紅茶の味がした。香りが強めでクセも強い。
「先ず私は謝罪しなくちゃいけないわ。貴方の記憶をちゃんと消去することなく転生させてしまった」
なんだか読み覚えのある展開だと思いました。テンプレですね分

ります。でも、転生してから六年も過ぎてからの事後報告は遅すぎる気がする。もっと早く来られたんじゃないだろうか？
「ちなみに、私のいる空間と貴方のいる空間は時の流れが千倍以上異なるの。だから私が貴方の転生の処理をしたのはつい一日半前で、貴方が記憶を持ったままだと分ったのはつい五時間前のことよ」
「はぁ」
気の抜けたような返事しかできない。つまり俺は『誤って殺しちゃった☆』でも『神様の暇つぶし要員にキミが選ばれました☆』でもなく、ただ記憶処理が半端なまま転生してしまっただけだと。
「他の神みたいに誤って殺してしまったわけじゃないけど、十分に申し訳ないことだわ。私からの謝罪の気持ちとして、貴方の容姿は将来メルヒェン・フォン・フレードホフそのものとまではいかないけど、そっくりになるようにしたわ」
「なん……だと！？」
メルメル恰好良いよメルメル。でも爺さんも母さんも父さんもさほどイケメンの部類に入らないはずだけど、鳶が鷹を産むなんてちょっとおかしくないか？――そう口にすれば、ニカ様（仮）は薄らと笑んだ。
「確かに私の仕事は魂に刻まれた記憶を初期化することよ。でも、能力はそれに則った物ではないの。私の能力は『可能性を選びとる程度の能力』よ」
東方ェ……。
「つまり、私は複数存在する選択肢や運命の中から一番最良だと思うものを選ぶことができるということよ。貴方の容姿もそう、私が彼らの遺伝子情報からメルヒェン・フォン・フレードホフに一番近くなる情報のみを選択したの」
その能力チート過ぎる。他人の運命さえ操れるじゃないか。
ニカ様（仮）は片ひじを突いて顎を預けた。視線が俺から外れテーブルの上を彷徨う。
「私がきちんと貴方の記憶処理さえしていれば、貴方の記憶は魂と

分離して理想郷に入るはずだったわ。だから気持ちだけでも受け取って欲しいの」
　ニカ様（仮）が沈んでいるのは見れば分る。心から申し訳なく思ってくれているんだろうことも。でも、さっきの口ぶりからするにニカ様（仮）とは違うサボリ魔や愉快犯がいるだろうことが窺えた。誤って殺された人、一体どれくらいいるのだろうか……。
「ニカ様（仮）、そんなに謝らないでください。俺はもう前とは別個の人間です。失敗なんて誰にでもありますよ。容姿をメルメルそっくりにしてくれただけで俺はもう満足です」
　日本人であった俺はもう死んだのだ。死んだ時の記憶なんてないけど、きっと事故死か病死かだろう。名誉の死なんてことはないだろうから……あれ、目から汗が。
「ちなみに俺はいくつで死んだんですか？　記憶は二十四までしかないのですけど」
「二十七歳よ。急性盲腸炎で救急車に乗ったは良いけど、病院をたらい回しにされて死んだわ」
「何それ酷い」
　未来ある若者――と自称するのは恥ずかしいが――がそんな悲しい原因で死ぬなんて酷すぎる。それも痛みで苦しみながら死ぬとか……ないわぁ。俺に記憶は残っていないが、担当してくれた救急隊員さんたちも、俺が苦しみながら死んでいく過程を見せられたと思うと可哀想だ。もちろん俺が一番可哀想だけど。
「貴方の寿命も死に方も初めから決まっていたことだわ。でも、貴方からすれば私も他の暇つぶし目的の神たちも同じようにしか思えないでしょうね」
「いや、手違いで殺されたり暇つぶしのために殺されたりするよりはだいぶマシです。こうしてこの場を設けてくれただけでも有難いですから」
　まあ、手違いや故意で殺されたらチートな力をもらったりして『俺ＴＵＥＥＥＥ！』を出来たのかもしれない。でも俺チキンだし。

いくら強大な力を得たとしても、その力で引き籠りになること間違いないし。今生でも引き籠りたいくらいだしね！　でっかい親――というか祖父――のすねがあるからそれを齧って生きていきたい。

「――ふふ。もし、君にはどうにもできないことがあれば私を呼んで。三度だけなら手を貸してあげられるから」

ニカ様（仮）は口を綻ばせ、俺の目元を覆った。

「私の名前はクロ――」

あ、眠ったんだ、とどこかでそう思ったのを最後に視界は黒く染まった。

ベッドにもぐりこんですぐ寝たせいか、ニカ様（仮）と話していたにもかかわらず普段に増して寝覚めが良かった。目を擦りながら起き上がれば窓の外は白んでいる。

「六時くらいかな？」

何時から朝食なのかは知らないが、まだだろうことは分る。ベッドから降りながらこれからのことを考える。

爺さんは――信じたくないが――国王の次に偉いのだとか言っていた。ということはたくさん勉強しなきゃならない。俺の頭がそれに付いていけるのか物凄く不安だが、まだ子供だしな……きっと脳みそが柔らかいのだと信じている。信じさせてくれ。

布団を出ると肌寒く、ブルリと体が震える。着替えを求めてクロゼットを開けて探してみた。一着や二着程度かと思っていたのに、これがどうして十着はあった。俺を見つけてから注文したのか、それとも伯父さんの子供時代の服か。後者だろうな。俺に似合いそうなのを選んで入れてくれたのだろう、昨日初めて見た俺の容姿なら似合うに違いない服ばかりだった。

適当に一着取って着ようとしたら、昨日着たのと構造が違ってさっぱり着方が分らなかった。もしや、服の型によって着方がそれぞ

れ違うのか……？
「貴族、面倒くさっ」
初っ端から出鼻を挫かれた。仕方がないから昨日着たのと同じ構造をしていた服を探してそれに着替える。昨日もそうだったが、身長的なサイズは合っていたが、体型は全く合っていない。腹周りも袖もブカブカだった。そして靴なんてものが存在していることを思い出す。――いや、思いだしたと言うよりベッドを振り返ったらベッドの下に靴が揃えて置かれているのを見た。
「靴下も履かないといけない、だろうな」
靴は後回しにして再びクロゼットを探る。靴下ならよほど変な柄でもない限り似合わないものはないと思う。靴下の入った引き出しを見つけて無難に真っ白な一足を選んだ。足に微妙な違和感。靴下は裸足に慣れた俺には気色が悪くてならない。それに加えて靴まで履くのだから背中までゾワゾワする。
とりあえず慣れれば違和感も減るだろうしと部屋の中を歩きまわればだいぶマシになってきた。前世では当然靴を履いた生活をしていたし、自分のしたいペースで歩けたのが良かったようだ。だがやっぱり裸足の方が好きだな……。何より足の裏は目よりもリアルに情報を伝えてくるから、それがなくなるのは物凄く心許ない。
貴族と言うものが何時に起き出すのか知らないし、呼びだされるまでここで待っていた方が良いだろう。――あのおばさんが俺の担当なのかなぁ……なるべくなら別の人が良いな。もっとこう、子供に対して大人げない行動を取らない人で。だってあの人ってば第一印象は最悪だわ見下しているのを隠そうともしないわ、本当に上流貴族のメイドですかと言いたくなる。まだ黒狐亭の女将の方が視覚的にはアレでも対応は良いだろうな。
「――ふう。これからは大変だろうなぁ」
ついため息を吐き肩をすくめた。今までが大変ではなかったというわけじゃない。それどころか今までの方が命の危険度は高かった。貴族による無礼討ちがまかり通っているし、加えて俺が最下層の人

間だったからな。だが、前世でも今生でも縁のなかった上流階級の皆さまとの交流――と言う名の腹の探り合いを思うと泣きそうだ。ヤダヤダ、なんで爺さんの地位はこんなに高いんだ？　引き取られるなら地方の弱小豪族あたりが良かった。

のそのそと歩いて椅子を引く。学習机の三分の一程度の大きさの小机と背もたれのある椅子が部屋の窓際にあり、机に両肘を突いて再び長嘆息した。まだ六歳というよりも、もう六歳なのだ、俺は。貴族の教育なんてどうせ生まれた時からやっているに決まっている――物心付くのが四歳程度としてももう二年の遅れがあるのだ。小説とかｓｓとかを読む限りそんなことが書いてあった。気がする。

それにたとえこれと言った教育をしていないとしても、親の背中を見て子供は育つのだ。俺のスタートラインは同年代の中でもかなり後ろの方だと思う。助けて母さん。俺、礼儀作法を身につけられる自信なんてないよ。

そんなことを悶々と考えている中、ノックの音が響いた。次いで聞き覚えのない女性の声。

「坊ちゃま、朝でございます」

そう言いつつ扉を開けたのは見覚えのない中年女性。――ここには中年のメイドしかいないのか。若くて可愛いメイドさんはどこにいるんだ？　萌えキャラじゃなくたって良い、とりあえず花も恥じらう年齢のお嬢さんはいないのか！？　なんというか見ていて痛々しい。本場ではこれで正解なのかもしれないけど、オタク文化で育った俺には見るに堪えない光景だ。執事は老年でも中年でも構わないがメイドは若いお姉さんが良い。男として正しい感情だと思う。

「んん、おはよう――えーと」

「ミーシャと申します」

「よし、改名してくれ」

「はい？」

「いや、一人事だから気にしないで」

何で。どうして。こんな残酷な現実があろうか！？　俺の永遠の

乙女ミーシャたんとこの中年メイドさんが同名なんて……！　神はいないのか、そうか！

「今日からエリク坊ちゃま付きとなりましたのでよろしくお願いいたします」

「こちらこそよろしく、ミーシャおばさん」

おばさん、と付けるのは苦肉の策だ。分ってくれ。

「坊ちゃま、どうぞ私のことは呼び捨てにな――」

「絶対に嫌だ」

そんなことした日にはミーシャへの申し訳なさで割腹する。運命に翻弄される双子への愛が溢れるあまりミーシャ人形をチクチクと作ったことがある位ミーシャ（だけじゃないが）が好きなのに。他にはそうだな、シャイたんとかライラとか。ルキア、サヴァン、オルタンスにヴィオレッタ、エル、パパ、冥王様と愉快な仲間達に息仔、クッキーも作ったな。中でもクッキーが自信作だった。サンホラーの友人には制作を頼まれたくらいには上手い。制作時にはまだイドイドさえ発売されてなかったからメルメル達はいないが。

「分りました……ではお着替えを――あら、自分でお着替えになったのですか？」

「うん。昨日着た服と構造が同じだったから」

他の構造の服はさっぱり分りません。

沈んだ表情のミーシャおばさんに少し申し訳ない気持ちになるが、これは俺としても引き下がれないから諦めてもらう他ない。

「では、旦那様がお待ちです。着いていらしてくださいね」

ミーシャおばさんの後について部屋を出る。昨日は目覚めたのが日没後だったからか、屋敷の内装へ受ける印象が全く異なった。防犯上どうなのかと思わなくもない大きな窓が三メートルごとにあり、薄いレースのカーテンと厚手のそれが二重にかけられている。カーテンの模様が金色に輝いている気がするのだけど、もしかして金糸で刺繍とかしてないよね？　そこまで無駄なお金を使っていたりしないよ……ね？

「エリク様をお連れしました」
階段を下りて数分、ミーシャおばさんがノックの後にそう言い扉を開ければ食堂だった。上座には爺さんがぽつんと座り、無駄に長いテーブルは目算で十五メートルはあった。それもコの字型のテーブルなものだから余計に『一人』というのが引き立つ。お客さんを呼んだ時用なのだろうけど、平時には寂しさが際立つばかりな気がする。
「おお！　早かったなエリク。良く眠れたか？」
「うん。寝が足りたからかスッキリ起きたよ」
そして朝食となったのだが、こっちのマナーなんて分るわけがない俺は皿とフォークやナイフでキシキシと耳障りな音を上げ、爺さんは最低の音で上品に皿を空にしていく。くそ、これはかなり恥ずかしい！
「エリク、お前には今日の昼から家庭教師が付く。なに。心配はいらんぞ？　儂の学園時代からの友人じゃからな」
お前の置かれていた環境に関して話はしてある、と爺さんは言った。俺はコクコクと頷く。洋食の店なんてさっぱり縁のなかった俺には分らないことだらけだ。和食のマナーならちょっとは分るんだけどなぁ……。
「どんな人なの？」
「どんな人――うむ、学生時代にはストーカー行為で頻繁に女性から訴えられていたな」
「え」
何その犯罪者。爺さん、そんな人を俺の家庭教師にするとかどういうつもりなの？
「悪い男ではないから安心しなさい」
物凄く不安だ。

０２・夢想→現実（後書き）

ストーカーといえば彼しかいませんよね！　ロリコンは三人いますがストーカーは一人しかいませんから。

現在、にじファンに移動した方が良いのかと悩んでいます。パロディ的要素を多分に含むので……。

03・貴族→困難

朝食後、爺さんの書斎に移った俺はアルファベット表記なんだが読み方がさっぱり分らない本を早々に諦めソファで転がってぼんやりと過した。昼食は爺さんが外出する用があるとかで一人で食べた。無駄に広い食堂が余計閑散として寂しかった。

そして今、俺は小規模な図書室にいた。置かれている本がどれもまだ新しいのを見るに伯父さんの書斎だったのかもしれない。爺さんの書斎はもっと広いけどこの部屋も十分に広いと言え教室一個分はあった。壁は窓際以外全て本棚で塞がれていて、絵本っぽい薄手のぺらぺらした本まで置かれている。――にも関わらず、本は棚の五分の一も入っていないのはどういうことだろうか。家が家だし本が高価だからという理由とは思えないし、爺さんはこれだけの物を用意しているのだから買い渋ったわけでもないだろう。伯父さんは読書が嫌いだったのかもしれない。

室内には畳一枚分くらいの大きさの机と椅子二脚が中央にでんと鎮座し、一脚は子供用の脚が長い物だった。窓際には俺なら寝返りを打てるソファが外に向けて置かれていて恰好の昼寝スペースと化している。まさか伯父さんはこの部屋を寝るためだけに使っていたとか、そんなことはないよ……ね？　そんな羨ましいことないよね？　ね？

ぐるりと部屋を見回し、まだ単語を読めない俺は本を読んで暇を潰すことも出来ずソファに転がって待った。

薄い紗のカーテン越しの外は明るく、たった昨日前のことだと言うのに俺と母さんをとても遠く感じさせる。日の当たる道、という単語が頭に浮かんだ。まさしくこちらは日向の道で、母さんのいるあそこは日蔭の道だ。もうきっと会えない。

光に手を翳してみれば赤みが増した手が見える。薄すぎる脂肪の層と筋肉の層のせいで、毛細血管は赤々と日を透かしていた。握り

締め、開いた。相変わらず骨ばって薄い手だ。たった二日で慢性的栄養不足の俺が健康優良児になれるわけないけど。
扉が開く音に身を起こせば爺さんが入って来た。立って家庭教師になる人を迎える。くたびれたタキシードにところどころ凹んだシルクハット――そして、顔が何よりも印象的だった。
「私はヨナタン・ヨアヒムだ。よろしく」
「紹介しようエリク、これが儂の学友でお前の家庭教師じゃ。ちょいとクセがあるが慣れればそれほどでもない」
その白髪混じりの茶髪の男を見た瞬間、眉毛しか目に入らなくなった。やけに長く天を突くように伸びていて、まるでシャーペンの芯を半分に折って刺したような状態だ。こんな眉毛が生える人間がいることを初めて知った。
「ああ、フォンだとか爵位だとかは気にしないでくれたまえ。爵位ほど無駄な数式はないのだから」
なんというかサヴァンっぽい。……なんで上流階級にはこんなにネタがたくさんあるのだろうか。爺さん以外の全員が何かしらのネタ持ちじゃないか。サヴァンのような発言をした男――ヨアヒム氏は長い眉毛をくいっと動かした。なんというか、あの眉毛光合成でもしているんじゃないだろうか？　先端に行くほど空に向かって直角になっている。
「――君、名前をなんというのかね？　エリク、ふむ、良い名前だ。これから私のことは先生と呼びなさい」
俺が名乗るとヨアヒム氏は呼び方を決め、満足そうに頷いた。そして爺さんを振り返って口を開く。
「私が机の前で教えるものは文字と簡単な計算だけだ。それで良いかねハル」
「たったそれだけで終えるつもりではなかろうな、ヨット？」
「まさか。私は机の上などでは真理は掴めないと知っているのだよ。文字？　計算？　出来て当然。机というものは真理を追究するには邪魔でしかないのだ」

爺さんと先生は二人の世界を作ってしまい、しばらく二人の話を聞いていたが、居場所のない俺は再びソファに倒れ込んだ。学生時代からの友人ということは二人の付き合いは長いのだろう、同世代にしか通じない単語やネタを出されても俺にはさっぱり分らず付き合いきれない。まるで妹が家に友達を呼んで来た時のような……意味の分らない専門用語が飛び交い怪しげな笑い声が響く「あれ」に似た雰囲気がどこかあった。

「さあ、我が生徒よ。しばらく待たせたようだ――細かく言うならば十分五十四秒。さて、私の言いたいことが分るかね、エリク」

爺さんが出て行ったあと、俺は脚の長い椅子に座り先生と向かい合って座った。

「分りません、先生」

知り合ったばかりの身で相手が何を言いたいのか理解するのは難しいと思います先生。

「五分あげよう。君も私が何を言いたいか――この数字の素晴らしいところが分るはずだ」

サヴァン、じゃなかったヨアヒム氏は髭を抜きながら言った。抜いた髭をペペッと床に捨てている――細かいことを気にしない性質のようだ。

俺は十分五十四秒という数字が何なのか五分間たっぷりと悩んだ。秒で言うと六百五十四秒、言葉遊びの駄洒落ではないだろうことは何よりも明らかだ。

「正確には五十四秒ぴったりではないのだが……見たまえ」

先生は首をめぐらせて一点に目を止めた。目で指されたそれは置き時計で、時間は二時十五分を過ぎていた。

「あれは何か分るかね」

「分りません」

俺はあれが時間を示すものだと言うことは知っているが、それをスラム育ちの「エリク」が知っているのはおかしい。それ以前に時計をここの言葉で何と呼ぶのか知らないから答えようもない。つい

でに数字も、九十台までは規則正しく「三と七十」のように言うから分るのだけど、百以上の単位となるとさっぱりだ。百以上の数字なんて路上生活で必要ないからね。
「あれは『時計』と言うのだよ。現在の正確な時刻を教えてくれる」
「とけい、ですか」
『とけい』と口の中で何度も繰り返す。第二言語の習得が面倒なのは既存の名称の知識があるせいだろうな……日本語を話したいと生まれてこのかた何度思った事か。でもここの言葉ドイツ語と類似しているし、そう悪い物でもないよな。Ｍ？ｒｃｈｅｎの本場にときめいてしまうのはサンホラーとして当然だ。でも全ては陛下が悪い。素敵すぎるのが悪い。Ｒｏｍａｎのようにフランス語でも良かったのだけど、やはり一度死んだ俺にはＭ？ｒｃｈｅｎが似合いなのかもしれない。メルメルの言う通り『死んでから出直して来た』ことだしメルメルも良くやったねって褒めてくれるかもしれない。
「今は二時十七分だ。後で時計の読み方も教えねばな――そうか」
先生は何かに気付いたらしく目を丸めた。先生を見上げれば顎髭を引っこ抜くところで、プチンという音が何故か大きく響いた。
「アチッ！……あぁ。君はまだ時計という概念さえ初めて知るのだったね。私も口先では理解していたが頭では理解できていなかったようだ。先ず時計の読み方と時計の目的を教えようか」
その摘まんでいた髭を抜くつもりがなかったのか先生は大げさなほど肩を跳ねさせ、抜けた髭を見て悲しそうにため息を吐いた。こういう形の髭をなんと言うのだか……カイゼル髭？　カウゼル髭？
まあ良いや。立派な口髭だとは思うのだが、眉毛のお手入れはしていないのを見るとどうも違和感が拭えない。その立派なお髭と対照的にもっさりしているその眉毛さんは何なのか、突っ込んで欲しいのかそれともお洒落のつもりなのか、さっぱり分らない。
「立ちたまえ。時計を見ながらの方が良く分るだろう」
先生に後に従って大きな置時計の前に立つ。金色の振り子が右に左に揺れていた。頭の中で懐かしい大きな古時計が流れた。二番が

何故か某州知事の替え歌になったけど。
「この細長い針が一周すると六十秒、それを一分と言う。分るかね」
「はい」
説明不足も甚だしいな……。俺は元々知っていることだから突っ込んだりしないが、ただの子供なら「秒って何」「分って何」と質問攻めにするだろう。
「そして一分と言うのはこの点からこの点までのことを言う」
指差しながら先生は簡潔すぎる説明をした。先生、俺みたいな転生者でもないとそれだけの説明では理解できないと思います。
「時計の読み方の問題を出そうか……少し待ちたまえ」
先生はぱっとテーブルに向かうと羊皮紙を引き寄せ、さらさらと何か書き始める。そして三つほど円を書くと短針と長針を書いて何時何分なのか答えるように求めてきた。それも筆記で。――この人、教師に向いてない気がする。いや、気がするどころじゃないか。「全く向いてない」んだ。俺はまだ書き方を学んでいないし数字も形が違って読めない。本当にこのおっさんに学んで身に着くのか不安だ。
「あの……」
「どうした、書かないのかね？」
「文字が分りません」
先生は手を打ってそういえばそうだったと呟いた。爺さん、本当にこの人に俺の家庭教師任せちゃって大丈夫なの？　これからがとてつもなく不安で仕方ないのだけど。
それからやっと俺が誘導してＡＢＣの書きとりを始めたが、羊皮紙に練習するのは勿体ないと思いざら半紙がないのか聞こうとして、ざら半紙をなんと呼べば良いのか分らず挫折した。それに、スラム育ちの子供が「羊皮紙はもったいないのでもっと安い紙で練習したいです」なんて言うわけにもいかない。
「これはこれは――ミミズののたくったような文字だね」
先生の書いた手本を前にＡＢＣを書いていったが、今日の朝食と

同じくらい恥ずかしい現状に泣きたくなった。慣れない羽ペンに字が軟体動物と化し読めたモノじゃないのだ。万年筆はまだ作られていないのだろうか？　ボールペンの有難味が良く分る。あのゲルインクってどうやってインクをゲル状にしているのだろうか……増粘剤かな。でも増粘剤と言ってもどんな薬品なのか知らないから作れるわけないし。

先生は俺の文字を見て要練習だねと言い、俺もこんな悪筆のまま一生を過ごしたくなんてないから練習に打ち込むことを心に誓う。

そして、先生が俺の文字もどきの横にサラサラと流麗なアルファベットを書くのを見ていて気が付いた。先生はサラサラと書いている。俺はガリガリと書いている。――俺は筆圧が強すぎるのかもしれない。バキリと何度もペン先が折れて、その度削り直した羽ペンを見る。次はもう少し「サラサラ」を心がけて書いてみようか。

「もう一度書きたまえ」

羊皮紙を返され、今度は筆圧をそんなに上げないように書いてみる。ペン先は折れなかったが字が掠れた。

「もう少し力を入れた方が良いようだね」

「はい」

繰り返すうちにマシになってきた文字を見て少し安堵する。誰の逸話かは忘れたが、物凄い悪筆の詩人（だったと思う）がいて、書いた本人さえ読めないような文字だったとか。弟子が唯一その文字を解読できたのだが、ある時どうしても解読できなかったため弟子は詩人に聞きに行った。詩人はその詩を見て一言「何で早く持って来なかったんだ。もうなんと書いたか忘れてしまったじゃないか。もうこの詩の内容は神のみぞ知るものになってしまった」。――こんなことには冗談でもなりたくない。みっともない以前の問題だ。

それにしても筆記体というものは慣れない人間には何かの一筆書きにしか見えない。文字と言うよりも記号、記号と言うよりも暗号……中高大と筆記体とは無縁に生きてきた俺にはどうも気色悪い書き方だ。英文学部に進んだ友人が「原文とかマジ無理、なにあれ暗

号の解読？」と零していたのを思い出す。だが同じように日本古典文学に進んだ友人も「ミミズが悶え苦しんでるようにしか見えない」と愚痴を言っていた。どこの国も同じなのかもしれない。

アルファベットを上手く書けるようになってノリノリでＡＢＣと書きまくっていた俺に、先生がじゃあ一から十まで書いてみようかと言った。一というと――アインだからａｉｎだろう、と思って書いたら上にバッテンを書かれた。何でだ。

「一はＥｉｎだ。ｅｉでアイと読むだろう」

いや、知らないから。なんだか物凄く理不尽な気がする……スペルの法則とか教えてもらってないのに。というか、この方法で上手く身に付く気がしない。先生は家庭教師には向いてないと心底思う。爺さん家庭教師チェンジして！　誰かもう少し名の知れた老先生とかにチェンジ！　この人家庭教師に向くタイプじゃないよ！

「それではトゥフィーだ」

二はｔｖａｙじゃなくてＺｗａｉだとか。英語のスペルのつもりで書いては駄目なのだろうと思いはしたけど、スペルが分るかと言えばさっぱりなのだ。もう俺この先生嫌だ……。

内心滂沱の涙を流しながら二時過ぎから五時半までの勉強を終えた俺は頑張った方だと思う。今晩もっと分りやすい家庭教師の先生に代えてくれるよう爺さんに頼むつもりだ。こういうタイプの教師はある一定以上の教育を受けた人間に講義をしたりする方が合っている。

夕飯まで一時間あるというから一人で書きとりの練習をして、ミーシャおばさんに呼ばれて食堂に付いたら爺さんはおらず先生がいた。先生はこれからしばらくこの屋敷に泊って俺の教師をするらしい。なんてことだ……。

そして寝る前にミーシャおばさんに「風呂は？」と聞いたら「そう毎日入るものではないでしょう？」と不思議そうに目を丸められた。俺が風呂に突っ込まれたのはスラム生活ため汚すぎるからであって、この世界では風呂には毎日入るようなものじゃないらしい。

スラムで体を洗わない生活をしていた俺が言うのもなんだが、貴族も汚いよな。香水はファ〇リーズみたいに香りで悪臭を抑え込むものじゃないと思うんだ。

これからの貴族生活不安ばかりだ。俺はこれからどうなるのだろう……。

０３・貴族→困難（後書き）

東北関東大震災に被災されました方々には遺憾の意を。現在避難生活を送られております皆さまの気がまぎれれば幸いです。

ところで、お気に入り３９件、評価１５Ｐずつ有難うございます！合計が１０８Ｐだったので「水滸伝キター！」とか思っています。ゲーム派ではなく横山光輝の漫画版派です。

水滸伝のような壮大な物語を欠けたら良いな、と日々研鑽であります。

０４・旅先→魔法（前書き）

だいぶお待たせしました。

０４・旅先→魔法

先生と勉強を始めて一年が過ぎ、俺は七歳になった。俺の手にも顔にも子供らしいふくふくとした脂肪が付き、骸骨に布を張ったような顔も見られるものになっていた。

先生は見た目を裏切りアウトドア派で、文字とスペルの法則を俺が覚えたと分かると西へ東へ俺を連れまわした。観光名所であるドリット川を源流へ遡ったり穀倉地帯を回ってどこの麦が一番美味しいか食べ比べたり。いつも手から羊皮紙の束を手放さないのは天啓がいつ下っても良いようにだとかで、一時間に一度は何かを書き込んでいる。旅行記でも書くつもりなのかもしれない。元々この国の出身ではなく隣国の生まれらしいし。

シャルフト公の跡取り孫息子だというのにここまで自由で良いのだろうかと思ったこともある。けど爺さんは何も言わないうえ、先生も気にした様子がない。気にしたら負けなのかもしれない。何に負けるかはともかくとして。

「そろそろ屋敷に帰ろうかね」

旅先で、先生がそう言った。俺は一も二もなく頷く。

「はい！　そうしましょう、先生！」

先生は宿がなければ女性をひっかけ、宿に泊まれば女将をひっかけ、木賃だけで泊まるという荒業を繰り返す猛者だ。その手腕は見事という他なく、コロコロ変わる恋の相手に顔と名前の一致が追い付かない。もしかしてこれがこの国の男の普通なのかと思ったけど違うらしい。爺さんはねじ切れんばかりに首を振って否定していたし。隣の国のお国柄だと聞いて生暖かい気持ちになった。

「路銀も帰りの途中で尽きるのじゃないでしょうか、これ」

先生が自由すぎるせいであっち行ったりこっち行ったり、日々路銀の残りとにらめっこする旅行だ。俺としてはもう少し計画性を持って欲しいのだが、先生は耳を貸さないし実際に寄り道しながらの

旅行は面白いしで、予定通りに目的地に着いたことは一度もない。
先生がぼうぼうに生えた髭を掻いた。ない方向を見つめて唸り、眉間に皺を寄せている。何かあったのだろうか。
「エリク、そろそろ君は七歳だ、そうだったね？」
「もう七歳の誕生日は過ぎました、先生」
誕生日はとうに過ぎたはずだが、先生の記憶に留まることはなかったらしい。かわいそうな俺の誕生日――母さんも父さんも正確な日付なんて覚えてないから、俺がだいたいで決めた誕生日だけど。
「まあ、普通の貴族なら十歳から始めるのが普通だが、良いか。年齢など関係ない。路銀も危ないことだし」
先生は何か決め、一人でうんうんと頷いた。いったい何をするというのだろうか――それに、十歳から始めるとはどういうことだろう。
「エリクよ、君に魔法を見せてやろう」
先生はニカリと笑み、深呼吸を繰り返す。遠目に村が見え、空に突き出た煙突からもくもくと煙が上がっていた――
魔法とは『精霊をおびき寄せて、魔力と結果を交換させること』だ。精霊は大気中に拡散しているため何かで気を引かなければならないということで、遠くまで聞こえる音が良いらしい。その音が気に入らなければ精霊はやってこないし、下手であれば言わずもがなだ。だから楽器を練習したり歌を勉強したりするのが魔法使いには必須なのだとか。言われてみれば、先生との旅路は常に歌い続けていた。あれは先生なりの教育だったのか……。
音が大きければその分精霊の集まりも良く効果も大きいが、代わりに魔力の消費も激しくなる。なにせ供給する相手が多いんだから当然といえる。歌や演奏が上手いと精霊も値引きしてくれるらしいが。
「研磨」
さっきまで気持ち良さそうに歌っていた先生が、歯の欠けたのこ

ぎりに杖を向けて唱える。するとのこぎりの表面を覆っていた錆が消え新品同様になった。つるつるとした表面は鏡のようで、やすりの跡も残っていない。
「固定」
そして先生は再びのこぎりに向かって唱えた。透明の黄色い膜がのこぎりを覆い、吸収されるように消える。
「――ほら、これで大丈夫だ」
「有難うございます！」
「新品みてぇだ」
村の人たちが歓声を上げる。俺は歓声を上げこそしなかったが、内心感動に震えていた。魔法！　していることは地味だが、魔法だ！
「ほら、まだあるだろう。持ってきたまえ」
先生は呼びつけるように手を振って言った。村の人たちは鋤や鍬を取り、先生の前へ持ってくる。――十や二十どころじゃない、四十や五十はある。これまた面倒そうなことだ、と他人事のように思っていた俺に、先生は指をクイクイと動かす。修理を頼む人でごった返した先生の近くから追い出されていた俺は慌てて先生の前へ潜る。人の波が重い。
「おまえの分だ」
「はい？」
先生は適当に鍬を十本ほど取ると、それを俺に渡した。
「やり方は見ていただろう？」
「見たことと出来るかは別問題だと思います、先生」
「案ずるより産むがやすし、してみたまえ」
村の人たちの視線が俺に集まる。この一年で成長したとはいえ、俺は一般的な七歳児よりも華奢だし背も低い。多めに見ても六歳かそこらにしか見えないのだ。そんな餓鬼が魔法を使えるの――彼らの目はそう言わんばかりだった。
「失敗しても怒らないで下さいよ」
「大丈夫だ、これくらいの魔法の失敗では何も起きん」

「あ、そうなんですか」
つまり大掛かりな魔法では失敗すると怖い目に遭うこともあるということか、と俺は納得した。今回は単に表面を研磨するだけの魔法だから失敗してもどうということはないのだろうが、例えば火を灯す魔法を失敗すると火事になったりするということだろう。しかし、表面を削りすぎて脆くするということはないのだろうか。まあ、してみないうちから失敗を恐れても無駄に緊張するだけだ。俺は先生の近くに座り込み、先生を見上げた。
「まずは歌いなさい。今私の近くに来ているのは『私の歌』を好む精霊だから、君が呪文を唱えたとしても成功することはない。まずは歌って、自分に合った精霊を呼びなさい」
「なるほど、分かりました」
精霊にも嗜好があるんだな、と少し面白くなってきた。アリプロとか好きな精霊がいたりするのか気になる。
歌うのはぴこまりんご飴☆。ノリが良いしアカペラで歌うのにちょうど良いだろう。
「ぴこまりから始めて――」
日本語だから歌の意味が通じるわけがないんだが、精霊なら分かりそうな気がして少し怖い。
大人になると周囲の目が気になり人目のある場所で歌うのが恥ずかしくなってくるが、今の俺は子供である。底辺の生活で何かしら辛いことがあるたび歌って紛らわせてきたことと先生と旅の間よく歌っていたのもあって、俺の声の伸びはかなり良い。
歌っているうちにだんだんノってきて大声で歌っていると、先生が俺の目の前で手を振って歌を止めた。
「君はどれだけ強力な魔法を使うつもりだね？　長く歌えばその分精霊の集まりも良い。そんなに集めて、君は巨大彫刻でも始める気かな」
しかし、俺には精霊など見えないのだ。集まっていると言われても全く実感がなく、どのくらい集まっているのか訊いてみた。

「私が呼んだのが十とすると、君は四十は呼んでいるね」
まだ初心者だから精霊が見えないが、練習すれば見えるようになるのだとか。
「研磨！」
――何も起きなかった。もう一度唱えてみる。
「研磨！」
やはり何も起きなかった。
「研磨ぁ！」
鍬には何も起きなかった。代わりに憐れむような視線と声が俺に集中した。泣きそうだ。
「エリク、私は言っただろう。魔力と効果を交換するのだ」
「魔力が分かりません、先生！」
なにせ前世ではとんと無縁な力なのだ。フィーリングでなんとかできるものでもないし、頑張れだのお前ならできるだのと言われても俺の精神を追い詰める以外の効果は全くない。ええいままよと何度も唱えるも失敗は続き、憐れみは度を増して憐憫にまでなってきた。憐れに思うなら見るな、放っておいてくれ！　その視線が一番心に刺さるんだ。
「魔力とは感覚で掴むものだからね。頑張りたまえ、エリク」
「……はい、先生」
そして俺はこの日、魔力を掴むことはできなかった。泣きたい。
先生のおかげでタダで泊めてもらった宿の固い布団の上で、俺は顔を覆って昼間の失敗を恥じる。みっともない、格好悪い。お願いっ！　ぴこ魔神！――神頼みしても無意味とは分かってはいるのだが、あれはかなり残念すぎる結果だった。
「明日こそは」
明日こそは掴まないと。先生は屋敷までの帰り道、俺に魔法の修行をつけると言っていた。つまり、さっさと魔力を掴まないと今日のようなことが毎度続くということだ。そんな羞恥プレイには耐えられない。

俺は布団の下で拳を握った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9797q/

↓底辺→天辺↑

2011年9月17日03時29分発行